毎月11日掲載

防災・減災のページ

むすび塾

巡回ワークショップ

@宮城・南三陸町歌津中

生徒も自ら考え行動を

避難行動、避難所生活の課題・教訓

第10回「むすび塾」は1月22日、宮城県南三陸町の歌津中（生徒135人）で開いた。東日本大震災の発生時に小学6年だった中学2年の生徒12人が、当時の避難行動や避難所での暮らしを振り返った。生徒たちは『津波を見たい』と言う人が多かった」「避難所で積極的に考えて行動すればよかった」など教訓や課題を口にした。

◇

震災当日、12人はそれぞれ通っていた町内の伊里前小と名足小にいた。海抜約15㍍にある両小学校は大津波に襲われたが、高台に避難し、無事だった。

「みんな、逃げるので精いっぱいだったと思いますが…」。進行役の減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長が、避難中に気付いたことを聞いた。

生徒は「津波を見たい」と立ち止まる下級生や、大人の姿を目撃していた。津波に巻き込まれた人はいなかったが、「本当はすぐに逃げなきゃいけなかった」と素早い避難の大切さをあらためて確認した。

「泣いている下級生がほとんどだったから、励ましてあげたかった」「足の不自由なお年寄りが坂を上る時に大変そうだった。手助けできればよかった」。子どもたちからは周囲を気遣う答えも返ってきた。

避難所生活を経験した生徒は朝食の準備や掃除、物資運び、小さな子どものお守りなど、さまざまな形で大人を手伝った。一方で「親に言われたことしかやらなかった」「自分からもっと積極的にやればよかった」と反省する声もあった。

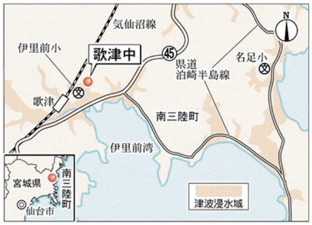
震災の教訓を今後の備えに生かすため、歌津中は全校生徒が参加する「少年防災クラブ」を2011年12月に結成した。自分の命を守ることを第一に、防災活動に取り組んでいる。

昨年9月には、避難所運営訓練を初めて実施。教師は指示を出さず、生徒が自らの役割を考えながら、救護所設置や炊き出しに臨んだ。

ネットワーク三宅島（東京）代表の宮下加奈さん(43)も参加し、中学2年で体験した三宅島（東京都三宅村）噴火を回顧した。「（災害は）強く生きることを気付かせてくれた」と言葉を送り、生徒は真剣な表情で聞き入った。

復興に向けてできることは何か、というテーマも話し合った。「勉強や部活を頑張る」「観光に来てもらえるような明るい町にする」といった答えに加えて「語り継ぐ」という意見も出た。

木村理事長は「災害があったことを知ってもらうには、いろいろな方法があるが、まず記録をきちんと残すことが大切」と指摘。復興のプロセスの記録や、地元の文化の保存を提案した。



生徒は30年前に被災を体験した先輩のメッセージに耳を傾けたほか、素早い避難行動や震災を語り継ぐことの大切さについて考えた

■むすび塾に参加して――宮城・南三陸町歌津中

【復興に向けて】頭を使って、しっかり考えられるようになりたい。部活も頑張る。好成績を残すことで町に活気を与えられると思う。災害に強い町にするため、一人一人ができることをする。

＝及川航君(14)

【震災の経験から】食べ物や電気、水などあって当たり前と思っていたもののありがたみを知った。復興に向け、何もなくなった町を作り直し、世界の人々が訪れる観光地にしたい。

＝及川大雅君(14)

【震災の経験から】家族や人とのかかわりが大切だと思うようになった。将来のために勉強やボランティア活動を頑張る。震災は嫌な思い出だけど、忘れてはいけないと思う。

＝大坂日菜さん(14)

【震災の教訓】町全体で避難や避難所運営の訓練をしなければいけない。支援への感謝を忘れず、復興にかかわる行事などに取り組みたい。歌津中が笑顔にあふれ、復興のシンボルになれればいい。

＝千葉晴貴君(14)

【避難所生活から】朝食づくりや配膳を手伝った。もっと周囲の人と話して元気を分ければよかった。復興のために、商店街で買い物をしたり、町のみんなを勇気づけたりしたい。

＝千葉怜奈さん(14)

【震災の経験から】震災はいつ起こるか分からない。つねに対策をしておくことが必要だ。自分の身は自分で守らないといけない。

＝渡辺悠斗君(14)

■専門家から

共助の経験 忘れずに

元気仙沼・本吉広域消防本部消防長　**菊田　清一さん**

30年前、志津川消防署歌津出張所に勤務した。東日本大震災が起きる前、地域の多くの大人にとっての津波体験は、志津川で41人が犠牲になった1960年のチリ地震津波だった。震災の規模はそれをはるかに上回った。

震災では、子どもたちもできる範囲で共助に動いた。今日もその話を聞いて感激した。

大津波の事実だけではなく、避難所や自宅で助け合った時の気持ちも忘れないでほしい。被災経験を糧に生きていくことが、風化させないということではないか。

ゲームで楽しく防災

東北福祉大ボランティア支援課コーディネーター　**渡辺　信也さん**

防災の取り組みを長く継続するこつは、楽しみながら活動すること。防災がテーマのゲームを作ったり、遊びを考えたりしながら、地域の人や下級生が参加しやすい環境作りをしてほしい。

地域に詳しい住民から、歴史や文化などを教えてもらうことも防災にプラスになる。地域に愛着が湧くと、地域を守る気持ちも育つ。

復興に向かう中で被災経験は風化するかもしれない。避難訓練や防災教育を通じて忘れないようにし、「防災力」の高い地域をつくってほしい。